



矢島 渚男 選

ほんのりと眠れる繭を紡ぎけり

朝霞市 田口 純

【評】繭は繭の入った状態で煮て糸を紡ぐのだが、長野県岡谷市の小学生が一定の低温で煮ることで、蚕の蛹を生かしたまま糸を取ることに成功したというニュースがあった。虫の命に寄り添った素晴らしい研究だ。それを詠んだ句だろうか。

菊日和鉢に大輪野に小菊

南足柄市 柏木 茂

【評】まだ続く暑さの中でも菊作りの人たちは労を惜しまず励んでいる。野の小菊たちはどうであらうか。終えること難き戦や法師蟬

宇都宮市 大門とよ子

【評】始めるより終らす方が難しい戦争。利害や指導者たちが選挙向け体裁を保つためのメンツの絡み合い。病葉に雨無き大地容赦なし

秋田市 斉藤 千哲

賑やかに牡丹餅握る秋彼岸

熊谷市 柿沼 好枝

秋めくや海に後光の影鳥海

にかほ市 渋谷 正秀

縫い包みと話すひとりの夜長かな

向日市 阿部 和子

「坂の上の雲」読む八十歳の秋

周南市 木船 君枝

過疎すすむ夕べ明るし蕎麦の花

広島県 三宅千恵美

帰省子に家中手摺ばかりなり

横浜市 我妻 幸男

高野ムツオ 選

敗戦を終戦と呼び繭雲

茨木市 木川 志佳

【評】「終戦」からはその安堵感と平和の期待感が伝わり、「敗戦」からは戦争への悔恨と呵責が伝わる。戦争を知る世代は後者にこだわる。繭雲が実に暗示的だ。

動く影ありて生者や門火焚く

東京都 天地わたる

【評】動く影だから生者であるはずだが、わざわざ「生者」と表現することで門火に呼ばれた死者かも知れないと思わせる。そこが巧み。繭雲そのまた先もいわし雲

川崎市 大野省之介

【評】秋空全体に広がる繭雲を見上げた時の実に率直な感動がそのまま句となった。未だ見ぬ国の空もまた繭雲が一面に広がっている。むかひ引く山気いつしよにこぼれくる

香川県 福家 市子

秋の蝶羽を重ねて安らへり

和泉市 山崎 文恵

斑鳩の塔を遙かに蜚草

門真市 皆木多恵子

踏切の警報器鳴る残暑かな

相模原市 はやし 央

艶やかな茄子を撰びて牛と為む

前橋市 内藤 光

しずかにして線香花火の玉落ちる

那珂市 宮沢 史子

秋日が一番若き今日生くる

横浜市 菅沼 葉二

正木ゆう子 選

霧の中声のごとくに鳥の過ぐ

北本市 萩原 行博

【評】鳥という視覚と、声という聴覚。五感はいずれも重要なツールだが、それにしても、声のように鳥が過ぎるという比喩は、不思議な気分になせられる。まるで霧に巻かれたよう。青林橋の声して少年二人過ぐ

会津若松市 佐藤 秀子

【評】声変わりの途中の少年の声は独特で、青林橋と言われないと、なるほどと思う。背も伸び、でもまだ子供っぽさもあり思春期まっただ中。アナログに生き扇風機そっぽ向く

相模原市 水野しづ子

【評】アナログと扇風機は相性が良さそうだが、予想に反してそっぽを向かれたようだ。それもまた俳句としては面白い。高性能の機種かも。初めから遠き呼び声法師蟬

土浦市 山本 勝成

葱の苗これが五度の土をかけ

松戸市 酒井 俳人

鳴き止んで思索に入るや法師蟬

東京都 杉中 元敏

溝萩は殖えると言へど貰ひけり

相模原市 大谷千恵子

空缶へ小さき鯉吾は五歳

高砂市 宮田 悦子

秋の雲時にはソフトクリームを

埼玉県 吉野利美子

朝まだき翁ひとりの尊舟

秋田市 進藤 利文

小澤 實 選

爽やかや守備鉄壁の三遊間

東京都 森 一平

【評】三塁手とショート連携プレーが完璧で、打球がそこを決して破ることはない。爽やかという気分と野球のきびきびした守備とが、まことに響きあっているのだ。蟬はしつかり蟬を抱へ喰ふ

埼玉県 小町 季生

【評】かまきりにとって、蟬はかなり大きい。せつたいに逃がさないようにという意思を、「しつかり」と「抱へ」に感じるのである。秋団扇電器屋の名のなかでかと

名古屋 徳広 光恵

【評】裏に「電器屋の名のなかでかと」と印刷してある、秋団扇はちょっと暑苦しい。しかし、どこにでもころがっているような現実感が魅力的。アイロンの効きしワイシャツ涼新た

神戸市 西 和代

箱庭に卓袱台七厘釣瓶井戸

武蔵野市 相坂 康

数珠繰りて「鬼さん出てつて」地蔵盆

京都市 吉田 基子

新涼やうすき身体の百済仏

東京都 大武美和子

マラーの「巨人」流れぬ夜の秋

国分寺市 加藤 武夫

秋立つや横須賀に入る英空母

越谷市 安居院半樹

犬の目がうるみ舌出す残暑かな

八王子市 斎賀 勇

短歌あれこれ 永井祐 (歌人) くだものの話

数人で好きな果物の話をしてきた。高校を出たばかりの人が「キウイ」と言った。キウイってめずらしいねと返すと、彼女は少し困ったように、めずらしくはない、クラスに3人いたと答えた。違和感があった聞いてみる。「クラスの人の好きな果物を把握してるの？」国語の先生が小説『檸檬』の授業の時、全員に好きな果物を言わせたからとのことだった。そのあと「檸檬はいませんでしたね」と言って授業を始めたそうだった。「ちょっと変な先生」と感想を言う「いや、変わった先生っていうわけじゃない」と正された。そういうわけで彼女は、自分のクラスにキウイが好きの人が3人いることを知っている。帰り道にアイスクリームのボックスをみてみるとキウイ味があった。キウイが好きなのはたぶん別にめずらしくない。柿の美のあまきもありぬ柿の美のしづきもありぬしづきそうまき 正岡子規



題字デザイン・イラスト

福田美蘭